

鹿児島県の有機農業者

生涯学習教育研究センター長
鹿児島大学農学部 岩元 泉

鹿児島県の有機農業者を1. 新規参入者、2. 2世代目の有機農業者、3. ベテラン有機農業者に分けて紹介する。これまで種々の機会に取材してきた有機農業者のモノグラフである。

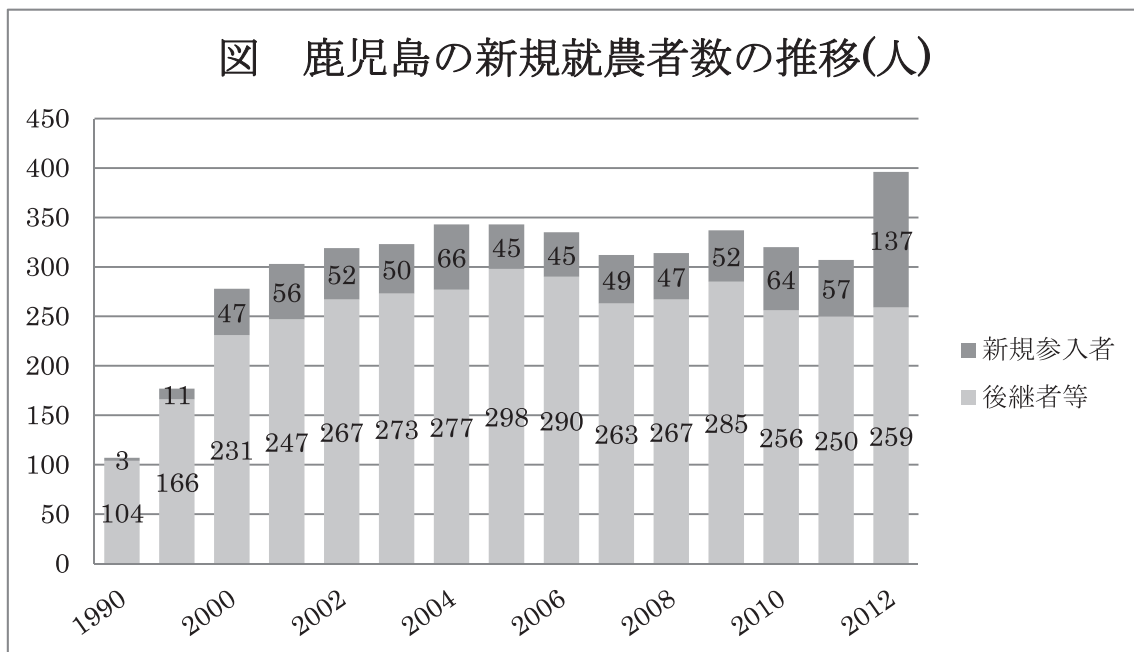
1. 鹿児島県の有機農業への新規参入者

鹿児島県においては新規就農者数が1990年代初めの年100人水準から次第に増加し、2004～5年には年350人近くまで増加した。その中で新規参入者数も増加していた。2006～7年にかけて増加数が低下し、年300人台に落ちてきていたが、再び新規就農者は増加に転じ、なかでも新規参入者は2012年には137人に達した。新規参入者のうち、有機農業を志して就農するものがかなりの数いると思われるが、正確な数は分からない。またこの図に掲載されない

就農者も有機農業の場合には多いと思われるので、一層正確な数はつかみにくい。

鹿児島県における有機農業新規参入者の動向を事例的ではあるが、調査してみた。(なお本調査は2009年から2010年にかけて実施したものである)

調査対象としては、かごしま有機生産組合新規就農者部会(加入3年未満の生産者)およびかごしま有機生産組合の直営農場である。これは有機農業参入のための研修農場となっている。かごしま有機生産組合の新規就農者部会には20名の生産者とかごしま有機生産組合の直営農場及び研修農場のスタッフ及び研修生7名がいる。部会長のS氏は新規就農してから3年以上経過しているが、部会の世話をするという事で部会長になっている。部会メンバーは鹿児島県内各地に分散しているので、その中から7名についての調査を実施した。



資料：鹿児島県農業・農村振興協会 WEB ページより

(1) 新規参入有機農家の事例

A) U.T氏(蒲生町)

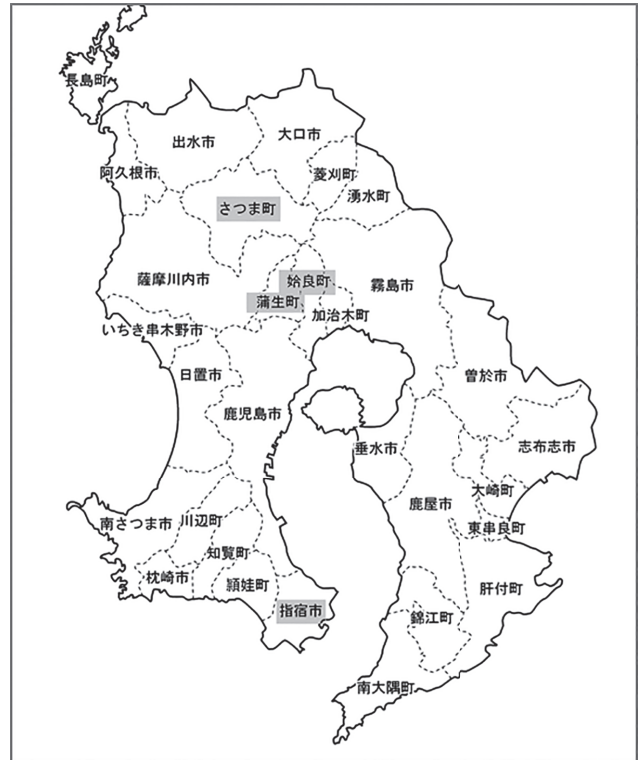
U.T氏は39歳(当時以下同じ)でH12年4月に就農している。鹿兒島大学を卒業後鹿兒島県庁に勤めたが、もともと在学中から就農の意欲を持っていたため、機会を見つけて就農したという。かごしま有機生産組合の蒲生農場で研修した後、有機生産組合に勤め、その後就農をした。家族は妻と息子の3人世帯である。農地は田34a畑120a合計120aでうち有機栽培は畑の120aとなっている。主な作物としては玉ねぎ30a、オクラ20a、シシトウ10a、ピーマン5a、ホーレンソウ5a、シュンギク8a、インゲン8a、スナックエンドウ5aを作っている。販売先はかごしま有機生産組合に70%、地元の直売所「くすくす館」に30%を出荷している。

有機農業の技術は、大学農学部およびかごしま有機生産組合の農場での研修と、先輩農家などから聞いて覚えていった。就農地はかごしま有機生産組合の研修農場があるところなので、知り合いの先輩から紹介してもらい、土地を見つけた。一部は購入したが、ほとんどは借地であり、先輩農家のツテで借りた。自分でいきなり行っても貸しては貰えなかった。就農にあたって自己資金で行ったが、蒲生町から新規就農者に一時金として100万円を貰った。

蒲生町には有機部会(6名)があり、行政の理解もあるのでやりやすかった。蒲生町では有機野菜が売上金額で1位なので町の振興策目に有機野菜があげられている。そのため有機ほ場に対して転作奨励金が10a当たり2万円支給される。就農までは、家、土地、金、人脈、技術など不安だらけであった。それで蒲生町で有機の人脈をつくってから就農しようと思った。経済的には厳しい。価格は一定しているが、差し引き残るお金は厳しい。今作目を増やしてきて、作業の限界に来ており、これまでよかった作目に絞っている段階で、面積拡大よりも効率や品質向上に力を入れるつもりである。

B) M.M氏(始良町)

M.M氏はH21年の1月に就農した非農家からの新規参入者である。現在37歳で家族は始良町出身の妻(会社員)である。妻はたまに手伝う程度である。以前は行政書士事務所に勤め、土地家屋調査士をしていたが、仕事の量が減ってきた。就農のきっかけは、妻の父がくも膜下出血で倒れ、手伝いを頼まれてエンドウの収穫をしたが、やっているう



※ 網かけは調査地

ちにおもしろくなり、やがて本格的にやりたいと思ったということだった。かごしま有機生産組合で1年間研修をした。

農地は、妻の実家(加治木町)の畑を、農業委員会を通して借りている。借地料は1~1.2万円/10a。隣町に住んでおり、ほとんど知らない人から借りているので、農業委員会を介している。土地を借りるときに有機農業をするといったら、断られたこともある。

面積は畑が85aで、うちすべてが有機ほ場である。作物は、ジャガイモ春15a秋10a、にんじん春7a、秋10a、サツマイモ15a、ピーマンとシシトウで5a、オクラ5aを作っている。就農にあたって、トラクターと軽トラック、芋掘り機、つる払い機を75万円で購入した。売上高は年100万円くらいで、販売先はすべてかごしま有機生産組合である。

現在有機生産組合の始良部会に入っている。一方、加治木町の認定農業者として申請中である。始良部会を知っていたので始良町から離れたくないという気持ちがある。始良有機部会は、JA、町、県が全面的にバックアップしてくれているので、一番恵まれている。

不安材料は土地の取得だった。研修の一年前から土地探しをした。認定農業者だと農地の斡旋をしてもらえるので、

申請をしたが通らなかった。今後は、技術を上げ生産力を上げていく。余裕ができれば土地を拡大し、ハウス栽培などもやりたい。

C) S.H氏(始良町)

S.H氏は平成H21年の3月から就農準備を始め、4月23日から植え付け始めた非農家からの新規参入である。就農前は、パン屋で製造の仕事をしていたが、小麦粉でぜんそくを起こし、体調を悪くした。農業にはテレビなどを見て興味を覚え、年をとってもできるのではないかと思いついて就農することにした。また妻の実家もオクラ、インゲンを作る農家であるが、妻の実家からは、やめろといわれた。

自分がぜんそくであるということもあって、有機農業を選択した。将来伸びるのではないかと思っている。就農前にかごしま有機生産組合で11ヶ月間研修をしている。

家族は妻と二人で現在36歳である。農地は田が40aで、すべて有機ほ場となっている。作物は、ナス5a、ピーマン2a、オクラ4a、カボチャ5a、インゲン3aを作っている。機械類は、トラクター、管理機、草払い機、ポンプを備えた。

就農するにあたって始良町を選んだのは始良有機部会がしっかりしており、町の体制もしっかりしていたからである。就農するにあたっての準備金はすべて自己資金でまかなった。土地の取得については、現在始良の有機農家Kさんの研修生ということにして、Kさんからの又借りになっている。土地、家を探すときには役場のコーディネーターと一緒に行って貰って探したが、なかなか見つからず、結局Kさんの口利きがあつて見つかった。

技術的には、作物の観察ができないために、判断が遅れてしまうことになる。今後は、サラリーマンの収入くらいまでは拡大したいし、面積も1ha位までしたい。トマトなどの手を入れる作物が好きなので、それを増やしたい。

D) O.T氏(始良町)

O.T氏はサラリーマンをしていたが、土地をもっていたので定年後は農業をしようと思っていた。60歳まで勤めると体力がなくなるので早期退職をして就農した。就農するときに鹿児島県に相談に行ったら、始良町は有機農業に熱心であり、始良町でやるなら有機でやったらいいと奨められた。H20年8月から植え付けを開始した。

現在54歳で家族は、妻と息子3人がいる。農地は、田が100aうちすべて有機ほ場であり、この他に自分の土地

が80aあるが、それは人に貸している。作物は、シシトウ200株、ピーマン200株、オクラ600株、エンサイ80株、ツルムラサキ60株、モロヘイヤ300株、ヒユナ600株、あと玉ねぎ、ニンニク、にんじん、シュンギク、小松菜などを作っている。売上は月25万円くらい。トラクター、管理機は妻の実家のものを使っている。

就農に先立って、かごしま有機生産組合の蒲生農場で1年間の研修を行った。資金は自己資金で、土地は自分の土地を貸している人から土地が空いているからということでその人のツテで借りたが、いわば放棄してある農地を管理している状態である。

かごしま有機生産組合とJA始良に出荷している。周りの人は関心が無く、野菜を作っているのは珍しいので、有機農業への反応もあまり無い。妻も特に反対はしなかったが、自分の親には有機農業を始めたことを話していない。会社を辞めて農業関係の法人に勤めていると言っている。体をこわさない程度に続け、息子の内の一人が農地が荒れない程度にやってくれることを期待している。

E) H.T氏(金峰町)

H.T氏(63歳)は水産系の高校を出て、船に乗っていた。父親に言われて(だまされて)24歳で帰郷して畜産を当初肉牛3頭ではじめ、50頭まで規模拡大したが、借金がかさんでやめた。その後消防署に勤め59歳で定年退職し、本格的に農業を行うことになった(4年前)。妻(58歳)も同じく金峰町出身で、結婚して以来、舅と家の農業に従事してきた。息子(33歳)は大学を出てから、いろんな仕事をしてきたが昨年(H21)の1月から就農している。

農地は田が75aと畑が20aで、すべて有機ほ場である。最近妻の兄が亡くなり、その35aの畑も任された。

農作物は早期米75aとブロッコリー20a、ソラマメ20a、赤シソ2aをつくっており、すべてかごしま有機生産組合に出荷している。昨年の売上は160万円くらい。

これまで子供が生まれてからは除草剤の使用はやめて米作りをしていた。有機JASは7年前に取得した。かごしま有機生産組合に入って3年目になる。かごしま有機生産組合を知ったのはOさん(かごしま有機生産組合のメンバー、茶農家、地鶏飼育で知り合った)から紹介され、有機JASが取得できることを知り、地域の航空防除をやめて貰ってJASをとった。それまでは山形屋デパートに米は納入していたが、トラブルもあったので、かごしま有機生産組合に

出荷するようになった。

3 前には日本自然農業協会の趙氏の研修会に1週間参加した。その1年前には妻が受講した。天恵緑汁を使ってぼかしをつくっている。その他、金峰の金ゴマグループに参加し、黒ゴマ、金ゴマ、えごまを鹿北製油と契約して栽培することになっている。修学旅行受入を5年前から行っており、グリーツリズム研究会に入っている。航空防除はやめて貰ったが、役場は有機農家とは認識していない。JAとも蛸殻や油かすを購入するくらいのつきあいである。今後は、人がつくらないようなものをつくりたい。兄から受けた35aをどうするか思案中である。

F) H.K 氏 (さつま町)

H.K 氏 (61 歳) は H21 年 4 月に定年でさつま町役場を退職し、農業専業となった。妻 (65 歳、埼玉県出身) は H18 年までは直売所でパートをしていたが、現在は農業専業である。

田 60a と畑で 60a であるが、有機は畑の 40a だけであり、有機以外の土地は緩衝地帯になっており、荒地地となっている。田 60a は H21 年 12 月まで人に貸していた。

作物としては小松菜、水菜、ホーレンソウ、大根、蕪、ミニトマト、キュウリ、ナス、ゴーヤなどで現在は有機転換期間中である。昨年の売上は 100 万円程度であった。

S55 年に帰京後、役場に勤めながら父の手伝いで週末農業をやっていた。家の農業は父母と妻 3 人が主にやっていた。妻は月 15 日パート、15 日農業手伝いという感じだった。

体にいい。食物にこだわると言うことで有機農業に関心があり、役場時代から考えており、K.M さん (かごしま有機生産組合のメンバー) を農政課長から紹介され、有機農業の勉強をした。研修については、県が行っている営農塾、県立農業大学の通信教育などを受講したが、これは一般の農業技術についてで、有機農業については、かごしま有機生産組合の一般公開講座や新規就農研修を受けた。技術的には K さんに教えて貰っている。

周囲の人は有機農業をやっていることを理解してくれているが、意義については分かっていないようだ。周囲にいるたばこ耕作者がピクリン消毒を行うので、自己防衛せざるを得ない。役場・JA からの支援はほとんどない。旧さつま町に有機野菜生産グループが 10 名くらいいて、K さんのところに保冷库があって週に 4 回組合から集荷に回ってくる。今後は技術力を向上したい。今は虫に食われたら

そのまますき込むしかない。

直売所には「栽培期間中農薬不使用」と表示して販売しているが、よく売れる。直売所は競争の場で、品質が問われる。B 級品は地元スーパーのクッキーなどにも出荷している。かごしま有機生産組合は転換期間中のものでも、有機と同じ値段で取ってもらえるから非常に助かる。営業活動をしなくてもよいと言うことだ。なければ、とても有機農業はやらなかっただろう。

G) Y.K 氏 (指宿市)

Y.K 氏 (40 歳) は東京出身で独身である。東京で会社勤めをしていたが自然が好きで、自然を相手にする仕事がしたいと思っていた。あちこち旅をしていてたまたま鹿児島に来て、新規就農の募集を見て応募した。額娃町の新規就農事業で1年間研修を受け、町の用意したハウスで花を始めた。1年終了後、ハウスを見つけれずに野菜作りを始めたが、なかなかうまく出来ず、町からの支援もなかった。借金だけが残った。地元の農家ともうまくいかなかったところ、開聞町で果物をやっている人と知り合い、教を請うことになった。その人が肝臓を患っていて、薬に敏感であった。そこで無農薬で栽培できるパパイアを知った。他にも産地がないことから取り組むことにした。

農地は借地で、ハウスを 12a、露地で 7a、すべて有機で行っている。作物はパパイア、グアバ、ドラゴンフルーツであるが、パパイアはかごしま有機と酵素の原料加工場に販売している。グアバとドラゴンフルーツはまだ販売する段階になっていない。その他に野菜を少々作っている。農業収益はほぼゼロである。機械類も全くもっていない。

鹿児島に来て 8 年目になる。額娃町の研修を受けたので 5 年間は額娃町に住む義務があったが、H21 年 5 月には解放されたので指宿市 (旧開聞町) に引っ越してきた。当初から有機農業をやりたいだったが、農協などは全く無理解で相手にされなかった。

就農に当たっては貯金を 300 ~ 400 万円用意した。県の就農準備金 100 万円を貰った。額娃町からは研修終了後 1 年間月 5 万円が出た。役場は有機農業をやっていることは知らない。集落の人は調べに来たから知っているだろう。近所の人は知り合ったばかりで、指宿熱帯果樹研究会に所属している。

田上二葉種苗園からかごしま有機生産組合を紹介されて、組合に加入した。最初は、簡単に就農できると思って

	住所	年齢	同居家族	農地		うち有機栽培	主な作物	販売先	就農時期	就農経路	前職	就農動機	研修	就農地	就農資金	土地	販売先の選択	地域との関係	生産者グループ	支援	就農前の問題	就農後の問題	今後
				田	畑																		
U.T.	蒲生町	39	妻+息子	34	120	120	野菜	かごしま有機+直売所	H12.4	新規参入	県庁職員	大学農学部で農業をやるうちうらなちになった	かごしま有機の研修農場のスタッフとなった	先輩の紹介	町の新規就農資金100万円	先輩農家のソツ子で借りた	かごしま有機	浦生町の有機グループ	蒲生町有機グループ	有機は場には転作奨励金が2万/10a	不安だらけ	経営の安定	面積拡大より、品目を絞って効率化・品質向上
M.M.	始良町	37	妻	85	85	85	野菜	かごしま有機	H21.1	新規参入	行政書士事務所	妻の父が病気でなくなり、手伝いをしているうちにうらなちにおもしろくなった	かごしま有機の年間研修	妻の実家の近く(藤町)知灌地域	貯金	借地	かごしま有機	土地を借りるのに苦労した	始良有機部会	始良有機部会はJA、町の支援を受けている	土地取得が不安、認定新規就農者に断られ、認定されない	技術を上げて、生産力を上げること	余裕が出たら土産地拡大
S.T.	始良町	36	妻	40	40	40	野菜	かごしま有機	H21.3	新規参入	パン屋の製造部門	パン屋、小麦粉で体調を悪くした。興味があった	かごしま有機で11ヶ月研修	町の支援体制がしっかりしているので、始良で	貯金	先輩農家の研修生という扱っている	かごしま有機	妻の実家からお話を聞いた	始良有機部会	土地、家を探すときに町のコーディネーターと一緒に探った	観察が出ないで判断が選ばれる	サラリーマンの収入が足りないまでは収入を上げたい	
O.T.	始良町	53	妻+息子2人	100	100	100	野菜	かごしま有機+A始良	H20.8	新規参入	会社員	自分の土地があまりで仕事をする体力がなくなってきたのでやめた	かごしま有機で1年間研修	現在地	貯金	自分の土地は貸しであり、その人からの紹介で勝手に耕している		周りは感がない	始良有機部会	妻は反対しなかったが、親には就農したいことを告げない	体をこわさない程度にやり、息子を継がせたい		
H.T.	金峰町	63	妻+息子	75	95	20	米+野菜	かごしま有機	S46 → H15頃有機JAS → H18頃かごしま有機生産組合	定年帰農	消防署	兼業で除草剤を使わない農業はやってきた。JAS認証は7年前から	自然農協の講習	現在地		米を山形で売った。トラブルがあり、知り人に紹介してかごしま有機に販売	航空防除はやめた。慣行が有機農家としていい	"かごしま有機自然農協" "グリーンリサーチ会" "金峰ゴールド" "マダラ" "さつま野菜" "有機野菜" "有機野菜" "有機野菜"	何をすればいいか、迷っている	妻の田舎の土地35aをどうするか？	何をすればいいか、迷っている	技術力の向上と販路拡大	生産が安定してきたら販路を拡大する
H.K.	さつま町	61	妻	60	120	40	野菜	かごしま有機+直売所+地元スーパー	妻が親と農業をしてきたが、定年を機にH21.4から本格就農	定年帰農	役場	役場にいきかけた	現在地		自分の土地	役場の紹介で有機農家を知った	理解があればこの耕作者との関係がある	町有機野菜グループ	ほとんどなし	特になし	技術力の向上と販路拡大	生産が安定してきたら販路を拡大する	
Y.K.	指宿市	40	独身	19	19	19	果樹+野菜	かごしま有機+酢原料工場	H14 → H21.5より現在地に	新規参入	会社員	自然を相手にする仕事をしたかった	"頼む町" "研修センター" "タナ" "先農家"	貯金300万円+400万円+県の就農助成金100万円	田上二葉種苗園からかごしま有機を紹介された	田上二葉種苗園からかごしま有機を紹介された	役場は知らない。集まるとは認識している	指宿熱帯果樹研究会	"県から助成金頼む" "研修後1年間" "5万円"	簡単に思った。研修後1ヶ月	町の言うことと実際のギャップ。農家はぼとんどゼロ	販売量・収穫量の向上、野菜の導入	

いた。しかし町の言うことと現実のギャップが大きく、町の支援へは不満がある。現在は田の農家の手伝いや、漁の手伝い（脇漁港の地引き網）をして暮らしている。

今後はパイヤやドラゴンフルーツに力を入れることと野菜を導入しようかと考えている。

H) かがしま有機生産組合直営農場（うち大口農場）

かがしま有機生産組合には鹿児島県内に3つの直営農場がある（平成22年当時）。蒲生農場、加世田農場、大口農場である。これらはかがしま有機生産組合直営の悠々農場として有機JAS認定を受けている。

そのうちの大口農場概要について。農場長はS.R（28歳）で、スタッフはY.R（25歳）である。現在研修生が1名（27歳、H21年11月から研修）。農場スタッフは月15万円の給与がでる。研修生には月3万円がかがしま有機生産組合から支払われている。かがしま有機生産組合では直営農場の経費は、教育研修経費として取り扱われている。

この農場はH20年7月からスタートしている。もともと地元の有機農家のI氏のは場を研修用に使っていたが、H20年7月からI氏、A氏の畑を引き継ぐ形で借地し、研修農場と位置づけ、悠々農場へと切り替えていったものである。農地については、外部から来た人に貸すことをためらう雰囲気があり、地元のI氏を通じて借りている（又借り）。したがって、伊佐市もこの農場を農業者としては認識していない（I氏の農作業を手伝っているという形）。

農地面積は140aで、うち80aが有機認証を受けている。作物は冬作物としてゴボウ25a、ニンジン10a、ホーレンソウ20a、小松菜15a、カブ5a、大根15a、春作物としてはズッキーニ20a（2作）キュウリ3a、トウガラシ10a、坊ちゃんカボチャ15aなどである。

農場の役割としては、研修農場としての位置づけと、直営農場として有機農産物をかがしま有機生産組合に供給する役目をもっており、冷涼地でもあるので、組合で不足する野菜をつくることも求められている。農場としての採算をとりながら、新しい作物に挑戦をしている。

農場長のS.R氏は、福岡県出身で滋賀県の自動車製造工場に働いていたが、農業が時代の雰囲気であると感じて会社を辞め、茨城県の日本農業実践学園で1年間の研修を受けた。機械も使わず、自前でぼかしや残渣を使った堆肥作りなどを現場で教わった。入り口がそういう農業だったので、自然に有機農業に入った。かがしま有機生産組合をイ

ンターネットで調べて、1週間研修を受け、いろいろな生産者がいるので、ここなら学べるのではないかと思い、鹿児島に来た。当初、かがしま有機生産組合の加世田農場のスタッフとなり、その後大口農場に来た。初めは自立しようと考えていたが、今はこの農場の採算をとりながらやっていけるようにすることで、時期を見て自立しようと考えている。

スタッフのY.R氏は鹿児島大学農学部卒業し、研修生を経て農場スタッフとなった。やがては地元の佐賀で自立したいと考えている。

(2) まとめ

有機農業への新規参入者にとってはかがしま有機生産組合の研修農場が果たしている役割が大きい。かがしま有機生産組合は加世田農場（南さつま市）、蒲生農場（蒲生町）大口農場（大口市）をもっており、それぞれ2人ずつの専任スタッフがいて、有機農業の研修を行っている。インターンシップ形式で、短期研修も受け入れるが、就農を希望する場合は1年間の研修を住み込みで行う。研修終了後の農地の斡旋なども行っている。

有機農業新規参入者は統計に表れない。M.M氏は住居と農場が異なる町にあり、認定農業者としてなかなか認められない状況にある。S.H氏はK氏の研修生という名目で土地を借りており、表に現れない。O.T氏の農地はいわば無断借用であり、彼が農業をやっていることをおそらく行政的には把握していない。親にも農業していることを告げていない。H.T氏、H.K氏、Y.K.氏らも行政からは有機農業者とは見られていない。

鹿児島県は地域振興局の旧農業改良普及センター等を通じて有機農業への取り組み状況を調べ、H20年度273戸、386haの有機農業があるとしているが、上記のように零細ではあるが、行政から把握されていない有機農業者がかなり存在していると思われる。それにしても有機農業への参入者は増えつつあるが、いまだにゲリラ状態であり、正規軍にまで昇格していない。

かがしま有機生産組合の販売面での存在は大きい。研修後の就農に当たって、ほとんど販売先を心配する必要がない。営業活動をする必要がないという声まで聞かれた。新規就農するには極めて有利な状況がある。

始良町、蒲生町は行政、JAの有機農業への理解が高く、毎月部会の研修会を開催し、技術情報の提供を行うなどの

支援を行っている。これはこれまでのかごしま有機生産組合のメンバー、I, K, M 氏らの長年の努力の積み重ねによるものである。また、研修農場についてもかごしま有機生産組合の既存のメンバーが技術指導や農地の斡旋などを行っており、その支援なしでは成り立たない。

2. 有機農業第2世代の新規就農者

有機農業が組織的に始まってから30年以上の月日がたっている。先駆的に有機農業を切り開いてきた有機農家に第2世代が育ってきている。鹿児島における有機農業の先駆者の第2世代について、二つの事例を紹介したい。

(1) S.M (26歳) S.H (25歳) 兄弟 (鹿児島市)

S.K 氏は鹿児島県でも草分け的な有機農業者であり、その活動は全国的にも知られている。S 氏には6人の子供がいるが、そのうち二人の息子がS.K 氏の跡を継いで、有機農業に参入している。その参入の仕方は、ドラマチックである。

兄弟のうち、兄のS.Mさん(26歳)は宮崎大学農学部を卒業しているが、卒業時には、サラリーマンを10年位してから農業をしようと考えていた。その時もらった父からの手紙で就農することを決めた。その手紙には、唐突に「有機農業が完成した。いつでもいいぞ」と書かれていたそうだ。有機農業が完成したのなら、売り方を頑張れば有機農業も面白いんじゃないか、そう考えた。S.Mさんは農業そのものよりも、有機農業に関連した商売をしたいという夢を持っていた。

弟のS.Hさん(25歳)は、昔から農作業が好きだったし、父の手伝いをよくしていた。農業機械に興味を持つようになり、大学も鹿児島大学農学部で農業機械を学んだ。それでも大学卒業と同時に農業に就くとは思ってはいなかった。少し勤めてから農業に就こうと思っていたが、特に就職活動をやったわけではない。自然に就農した。

二人とも、親がやっている農業が当たり前の農業だと思っていた。有機農業がどういうものかは知らずに手伝いをしていた。有機農業が重要な農業だと知ったのは大人になってからだ。

現在S.Mさんは無農薬野菜ネットワークの事務局次長として、9家族の生産者と消費者で作る宅配ネットワークを切り盛りしている。ネットワークの仕事が週2回入り、あとは農作業を行っているが、最近はネットワークの仕事の

比重が大きくなりつつある。S.Hさんはもっぱら父と一緒に農作業をやっている。西別府町の自宅周辺と約70km離れた湧水町にある圃場を行き来する。忙しい時には畑に建てたハウスで寝泊まりすることもあった。H22年からは畑の中に倉庫を建てたので、そこに泊まれるようになる。

二人も就農したから経済的には大変だが、有機農業の技術に磨きをかけて、ちゃんとした評価をされる野菜を作っていく。将来は会社組織にして、有機農業を目指す若者を育てたい。それが二人の当面の目標だ。このようにS兄弟は父からの手紙に導かれて有機農業の世界に入った。有機農業の広げるのが夢であり、第2世代は有機農業の申し子である。

(2) S.Y (出水市)

出水市の合鴨稲作農家のS.Hさんが亡くなられて8年、父の死で急遽プログラマーから転職して就農した息子のS.Yさんは、妻のS.Hさん、お母さんのS.Tさんと8.4ヘクタールの有機稲作で頑張っている。

帰ってきて農業に就いたら、練習はなくて、いきなり本番だった。代掻き 整地もやったことなかったから、教えてもらったが、分からないことばかりで、1年目は大変だった。とくに有機農業は草と虫との闘いで、草取りが一番大変だった。

最近トビイロウンカが大発生して、駆除のために食用油をまいてはたき落とす方法をとっているのだが、プロワーを使うと作業は早いんだけど、周りから葉をまいているのではないかと誤解を受けるので、タンクを外してやりしている。

有機の稲作は害虫を避けて、作付時期を変えることと、密植にせず、風通しをよくし、太陽光を取り入れること病気を防ぐことで成り立っている。慣行農業は決まった時期に農薬をふるから、田んぼにはあまり人が出ていない。しかし、S家では3人で草取りをする。そうすると珍しがられて、写真を撮られたことがある。周囲の理解は広がってきたが、まだまだ「無農薬で稲作は出来ないよ」という人がいる。

お母さんのS.Tさんが、嫁いできて家計をしてみると、米の代金から、農薬代など経費を引かれて、残りで生活するという生活であった。それに疑問をもつと同時に、農薬を使わない農業をやりたいと思い、虫が来たときだけ農薬を使うことは出来ないか、出来るだけ葉を使わない方法は

ないか、夫の故 S.H さんに相談したところ、それなら、一挙に有機農業をやろうということでアイガモ農業に取り組んだそうだ。S.H さんは鹿児島県内でのアイガモ農業の熱心な実践者であった。

S.T さんに言わせると、有機認証は確かに大変だけど、以前から労働時間の記帳などをしていたので、それほど難しくはなかったそうだ。また、有機農業は農薬を使わないから、経費は安くなるのではときくと、農薬を使ったことがないので、どれくらい節約できるかわからないという答えが戻ってきた。農薬に関する知識は全くないそうだ。初めから有機農業だったから無理もない。

S.Y さんは、そのままプログラマーを続けていたら、結婚していたか分からないし、今は結婚して家族と一緒にいられるからいいと思うし、有機農業は子供のためにもいいと思う。地域での有機農業への理解はまだまだで、有機米も地元の出水市では全く売れない。もっぱら鹿児島市で販売している。しかし、以前に比べたら、徐々に理解してくれる人も増えてきているという。

(3) まとめ

S 兄弟、S.Y の二つの事例に共通するのは、慣行農業を知らない、ということだ。農薬についての知識が全くない。このことは第2世代有機農業者を象徴することである。これは、一面知識の偏りと評価されるかもしれないし、他方では不必要な知識はもたなくてよい、という評価にもなるだろう。

3. 鹿児島県のベテラン有機農業者

(この項目は鹿児島県が設置している有機農業 PR アンテナ圃場について取材を担当した有機農業者である)

(1) 【自然農園・N.T さん】(南さつま市)

① 経営の概要

経営面積は現在拡大中だが、有機圃場 7 枚 127a で、10 数種類の果樹を栽培している。主なものは、グレープフルーツ・ライム・桜島小みかん・スイートレモネード・かぼす・レモン・早香(ソーカ)・スイートスプリング・ぼんかん・ネーブルオレンジ・たんかん・はっさく・河内晩柑・金柑である。

H13 年に南さつま市笠沙町の実家に帰省し、親の果樹経営を引き継いで就農した。奥さんは農外で働いているので、草刈りに人を雇うだけで、農業従事者は 1 人である。東京にいたときから有機農業・自然農業に関心があり、就農後

水俣の N さんを知り、自然農業を始めることになった。

② 自然農業

N さんの農法は自然農業である。基本的には畑の主人公である微生物を豊かにするために、ぼかし肥料を活用して微生物を増やし、草生栽培で除草はせず、適宜草刈りをして栽培している。病害虫対策としては、樹を弱アルカリ性に保つことで病害虫を寄せつけないようにしている。微生物は、落ち葉に米ぬか、大豆カスなどを足して放置しておけば、その土地の微生物が集まって増殖するので、それを取り出してぼかし肥料に使っている。また様々な自然の資材を使って葉面散布を行い、果樹と畑の活性化を図っている。

③ 販売方法

販路は自分で開拓した。現在は、東京と大阪の会社と契約し、インターネット販売を行っている。特に大阪の会員制組織オルターとの取引を始めた。注文に対して品物が足りない位で、作ったものは全部売れている。レモンなどは 2 週間で売り切れてしまった。これからの農家は、消費者が求めているものを作る。多様なものを作るのが良い。消費者と一年中付き合っていたい。温暖化の傾向もあるので、それに順応してグレープフルーツを作ったところ、すごい人気で、国産の無農薬のグレープフルーツは他にはないので、サイトに載せた途端に注文が殺到した。オルターからは、大豊作になって余った時も、少ししかとれなかったときでも取引すると言われている。インターネットの会社にしても常にものがある方が良いということらしい。

④ 今後の展望

自然農業をやっている人は右肩上がり伸びていく。しかし、周囲の理解がまだ十分でない。特に地域の若手の人は関心が示さない。農薬を使わずになんで果樹ができるかという反応である。子供の頃手伝った経験があるので、自然農業をやると面白いしやりがいがあるし、やっていけるめどがついてきた。今後は果樹栽培を土台にして、何人かで協同で暮らしていけるのではないかと考えている。友人が都会にいたので、さそってみんなで助け合ってやっていけば、2 町歩くらいで暮らしていける。また原発で避難してきた人も受入れられる。自分としては、これからどんどん樹も大きくなっていくので、十分やっていける。有機

JASは取引の上で必要であるが、表示のことだけではなく、有機農業の中身を進めていくべきである。

(2) 【U製茶・U.K, U.E】(霧島市)

① 経営の概要

U夫妻は霧島市牧園町で424aの有機茶を息子夫婦と一緒に生産している。親の茶園を引き継いで茶をつくっていたが、一部の茶園が老朽化し、肥料も農薬もやらず放っておいたところ、その園の茶をほしがる人が現れ、S62年頃から10a位だったが有機栽培として知り合い向けの自販として生産した。

② 有機農業への転換

続けていくうちに、老木が元気を取り戻し、ダニもつかなくなり、雑誌で紹介されて人気が出てきた。市場に出せるお茶じゃないといけないとおもっていたが、そんなお茶が求められていることがわかり、こちらは市場用、こちらは自販用とわかるのもおかしいと考えるようになったこともあり、H8年に全面的に有機栽培に切り替えた。有機農産物として全面的に販売したのはH9年からで、当時は3ha位だった。販売を始めると、転換期間中とはなに？と質問が来たりして、目を引くようになり、JAから有機栽培茶がほしいというオファーが来ることになった。

③ 栽培方法

現在主流のヤブキタは有機に向いていないと思う。害虫がつきやすい病気も入りやすい。昔ながらの在来種は有機に向いている。2番茶のあとは切ってしまう夏場は虫が多いので、3番茶をとると翌年まで影響がある。除草が最も大変で、基本的には草は手で取る。肥料づくりについては、米糠、魚粉、海藻などを単品で買って、EM菌をいれて1トンの攪拌機で攪拌し、それを10aあたり30-40kg、年に10回散布する。

④ 販売方法

荒茶をJA鹿児島茶業とO製茶の2箇所の間屋に販売している。価格は相場に左右されない価格で、安定しているのがよい。JAから埼玉県の間屋が購入し、「霧島だより・Uさんのお茶」として埼玉のスーパーで売られている。岡村製茶では一番茶から最後の茶までをまとめて買ってきて、混ぜて仕上げているようである。自家製茶も行ってお

り、これまでのお客さんに直送するほか、店頭販売としては、生協コープ、関平鉱泉の販売所、岩崎ホテルなどで行っている。奥さんのU.Eさんは女性日本茶インストラクターとなって、消費者へのPRにも力を入れている。

⑤ 今後の展望

H10年に息子が農大を卒業してすぐに就農した。農大でもお茶を専門としていたが、もともと農薬を掛けるのがいやだったので、有機栽培にははじめたが、やはり害虫が発生すると、心配をしていた。しかし我慢をすれば天敵がいて治まることが分かり、今では息子夫婦と一緒にやっている。有機JASについては最初から関わっており、有機JASをつけないと問屋さんは買ってくれないので必要なものだと思っている。その中でも全部有機の農家と慣行との併用農家などのランク付けがあってもいいのではと思っている。茶工場が手狭になっており、設備投資をしたいけど、個人では補助を受けることが出来ないで困っている。面積を拡大しても加工ができないとメリットがない。また、面積を拡大しても労力が足りず管理が行き届かなくなる。今後引退後息子夫婦二人になり、人を雇わずにやって行くには、設備投資が必要になるし、いずれ会社にするとも検討しなければならぬ。もしそれが出来なければ、生業生産だけにするか、あるいは小規模にするかしなければならぬだろう。

(3) 【F.Yさん】(霧島市)

① 経営の概要

霧島市国分でS54年から農業を初めたが、当初は12-30aの慣行栽培を行っていた。H4年に鹿児島県でアイガモ農業のフォーラムがあり、それに参加したことがきっかけとなり、アイガモ農法に取り組むこととなった。現在は400aの全面積中有機栽培が212aで、そのうち62aがアイガモ農法になっている。地元の出身であるが、農地所有は少なく自分の土地は15aのみで、ほとんどが借地である。一時期700aまで増やしたことがあるが、目が行き届かなくなったのでやめた。

② 栽培方法

150aの有機栽培は、タニシ農法や手取り除草、田車除草などをやっている。労力は1人で、田植機を近所の有機農家から借りるほか、収穫には友人がやってきて手伝って

れる。所有機械はコンバイン、トラクター、田植機、乾燥機2台、籾摺り機、動噴、ポンプ、バインダーなど一通り持っている。有機農業は大変だけれど、苦痛ではない。作っていることが面白い。自然の中で仕事ができる。技術的には、カモを入れるタイミングが問題で、特にネット張りのタイミングを外すとカモが草を食べない。カモは自分で孵化するが、現在は、カモの処理は特にしていない。

③ 販売方法

有機米は個人消費者に売っており、最初の時からのお客12－3人いる。それが全体の20%位を占めるが、残りがかごしま有機生産組合に販売している。kg当たり玄米600円で販売している。慣行栽培の米は個人業者に販売しており、JAとの付き合いはない。かごしま有機生産組合の直営店地球畑に行って販売活動を時々行っている。

④ 今後の展望

これからは、面積を少なくして丁寧に作って見たい。米の味をおいしくしたいと思っているが、なかなかうまくいかない。雑草を集めて堆肥をつくりたい。そのためには面

積を減らさないならいいと考えている。現在63歳だが、借金さえなくなれば、65歳で年金をもらい、早く自給生活に入りたい。

4. まとめ

これまでインタビューを行った鹿児島県の有機農業者を、新規参入者、有機農業二世代目の後継者、ベテラン有機農業者に分けてモノグラフ的に記述してきた。有機農業を始める動機、有機農業への参入契機は様々であり、行っている有機農業も多様であった。また、有機農業者と行政や有機JAS認証に対する対応もそれぞれ異なっていた。鹿児島県は全国でも有数の有機農業が盛んな県である。多様な有機農業のあり方を許容する風土が形成されつつあるのではないかと取材を通じて感じた。

有機農家は販路に苦労していることが多いが、ネット販売や販売組織を通じた広域的な流通チャネルだけでなく、身近な流通チャネルを形成している事例も多かった。流通の形態も多様に展開していることが多様なあり方を支えていることがよくわかった。